

「外地」中等教員ネットワークと広島高等師範学校

—朝鮮における師範教育界の事例に着目して—

山下 達也（明治大学）

はじめに

本稿は、帝国日本の「外地」で中等教員となった広島高等師範学校の卒業生に焦点をあて、その広がりと繋がりについて検討するものであり、その際、特に植民地朝鮮における師範教育界での事例に着目するものである。

広島大学教育学部日本東洋教育史研究室編『中等教員史の研究』によれば、「(広島高等師範学校卒業生の一山下註) 師範学校への就職者は三〇パーセントを超える時期もあったが、昭和になると下降し始め数年間は一〇パーセント以下の低水準にとどまった」⁽¹⁾という。すなわち、昭和期に入ると卒業生のうち師範学校に就職する者が減少・少数となったことを指摘しているが、その一方で、広島高等師範学校の師範学校教員全国シェアは、「大正以後、一〇パーセントと一五パーセントの間を推移」⁽²⁾しており、中学校、高等女学校に比して高いシェア率を維持したという点にも触れられている。

つまり、少なくとも数量的には師範教育界における広島高等師範学校（卒業生）の存在感は大きく、広島高等師範学校にとっても毎年一定数の卒業生が就職する先となっていたが、師範学校教員の市場規模が小さいがゆえに、その就職者は低水準にとどまったといえる。

日本「内地」における師範学校教員の市場規模が拡大しない一方、「外地」では、現地での教育を担う教員を養成するため、師範学校が新增設されていく。特に朝鮮では、1921年以降、各地に師範学校が新設され、1944年までに16校という、帝国日本の「外地」でもっとも多数の師範学校を擁した⁽³⁾。「内地」における師範学校への就職が頭打ちの状態であった中、師範学校が新增設され続けた朝鮮は、広島高等師範学校にとって卒業生を送り込む新たなマーケットとして位置づいたものと考えられる。

そこで本稿では、朝鮮における師範教育界と広島高等師範学校卒業生の関りについて可能な限り明らかにしたい。

広島高等師範学校の卒業生が朝鮮の教育とどのような関りを持ったかという点について検討したものに稲葉継雄の研究がある。稲葉は、『広島高等師範学校一覧』の歴代卒業生名簿や学校史から、本科・研究科を卒業した旧韓国・朝鮮関係者331名（日本人299名、朝鮮人32名）の勤務先・職階を明らかにするとともにいわゆる「学閥人事」についての検討を加えている⁽⁴⁾。そのうち、師範学校への就職者については、63名の卒業生に着目している。その結果、京城師範学校を中心に、朝鮮では師範学校設立当初から尚志会員の広がりが見られたことが明らかにされている。

では、朝鮮に師範学校が設立された直後から尚志会員がどのようにして（あるいはなぜ）そこに入り込むことができ、その後、一定の広がりを見せたのだろうか。こうした点についての考察を行なうためにも、本稿では、朝鮮にまだ師範学校が設立されていなかった時期における尚志会員の教員養成教育への関与にも着目し、「新設師範学校期」（時期の区分については後述する）との連続という観点から論じることとした。

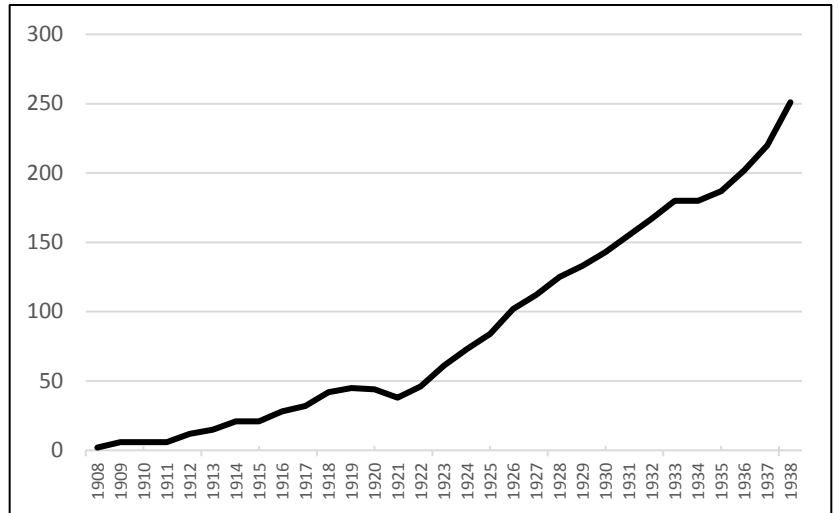
なお、本稿で分析の対象としたのは、広島高等師範学校の『学校一覧』で卒業生の動向が確認できる 1938 年までである。

第 1 節 朝鮮における広島高等師範学校卒業生のひろがり

まずは、朝鮮の教育界において広島高等師範学校の卒業生がどのような広がりを見せたのかについて概観してみたい。

『広島高等師範学校学校一覧』に記載された卒業生の動向を確認する限り、1938 年までに一度でも朝鮮に渡った尚志会員は 315 人である。そのうち、朝鮮の学校等での勤務後、「内地」に転出した者は 31 人、他の「外地」に転出した者は 15 人、朝鮮畑を歩み続けた者は 269 人であった。つまり朝鮮に渡った尚志会員の多くが朝鮮に定着したことになる。

【グラフ 1】 広島高等師範学校の卒業生が教員として在籍する学校数



(『広島高等師範学校学校一覧』を参照のうえ筆者が作成したもの)

1910 年の時点で朝鮮の教員であったのは、今井半次郎（1906 年博物学部卒業）、岡村直治（1907 年英語部卒業）、宮原秀雄（1907 年博物学部卒業）、長谷了慶（1907 年博物学部卒業）、千葉天裔（1909 年国語漢文部卒業）、福家巖（1909 年博物学部卒業）の 6 名である。今井は平壤高等学校、岡村、宮原、千葉の 3 名は釜山高等女学校、長谷は京城官立外国学校、福家は元山尋常高等小学校の教員であった。ただし、宮原以外の 5 名は 1913 年までに「内地」に転出している。（今井は 1913 年に東北帝国大学に学生として入学。）

その後、朝鮮には広島高等師範学校を卒業した教員が増加し続ける。それに伴って広島高等師範学校の卒業生が教員として在籍する学校数は増加した。その推移を示したものが【グラフ 1】である。

ちなみに、朝鮮に師範学校が設立されたのは 1921 年（京城師範学校）のことであり、前述したようにその後、他の師範学校が新增設されることとなる。以降、広島高等師範学校卒業生たちは朝鮮各地の師範学校に赴任しており、その結果が【グラフ 1】に見られる 1921 年以降の目立った増加に表れている。

第 2 節 師範教育界における広島高等師範学校卒業生の広がり

では、朝鮮に設立された師範学校において広島高等師範学校の卒業生はどのような広がりを見せたのだろうか。

朝鮮における師範教育については、制度的特徴の異なりによって、「官立漢城師範学校期」（1895～1911 年 11 月）、「師範学校不在期」（1911 年 11 月～1921 年 3 月）、「新設師範学

校期」(1921年4月～1945年)に大別できる。このうち、広島高等師範学校卒業生たちが教員として在籍し、朝鮮における教員養成に関わったのは、「師範学校不在期」と「新設師範学校期」である⁽⁵⁾。

そこで以下では、両時期における広島高等師範学校出身教員の在籍状況について検討する。

第1項 「師範学校不在期」(1911年11月～1921年3月)

「師範学校不在期」には、文字通り朝鮮に独立した教員養成機関としての師範学校がなく、初等教員の養成は、朝鮮総督府中学校附属臨時小学校教員養成所、官立高等普通学校の附属臨時教員養成所、師範科、教員速成科、官立女子高等普通学校の師範科において行なわれた。【表1】は、「師範学校不在時」の教員養成についてまとめたものである。

この時期、教員養成が行なわれていたこれらの学校に勤務した広島高等師範学校卒業生たちについて確認してみよう。

【表1】「師範学校不在期」の教員養成

	中学校附属臨時小学校教員養成所	官立高等普通学校			官立女子高等普通学校	
		師範科	教員速成科	附設臨時教員養成所(※)	師範科	附設臨時教員養成所
修業年限	1年	1年	1年以下	3年・1年	1年	1年
入学資格	中学校卒業者または17歳以上でこれと同等以上の学力を有する者	高等普通学校卒業者	高等普通学校第2学年課程修了者または16歳以上でこれと同等以上の学力を有する者	中学校卒業者または16歳以上でこれと同等以上の学力を有する者	女子高等普通学校卒業者	高等女学校・実科高等女学校卒業者または16歳以上でこれと同等以上の学力を有する者
養成対象	小学校教員	普通学校朝鮮人教員(男性)	普通学校朝鮮人教員(男性)	普通学校教員(男性)	普通学校朝鮮人教員(女性)	普通学校「内地人」教員(女性)

(※)当初は普通学校朝鮮人教員の養成を目的としたが、1913年、第一部(3年制)で朝鮮人教員を、第二部(1年制)で「内地人」教員を養成することとなった。ただし、1914年以降は「内地人」教員の養成のみを行なっている。(「京城高等普通学校附設臨時教員養成所規程」)

まず、朝鮮総督府京城中学校には、小菅昌三(1911年博物学部卒業)が1912～1919年、正井芳樹(1912年英語部卒業)が1912～1917年、尾形友助(1907年数物化学部卒業)が1913～1920年、阿部丁蔵(1910年地理歴史部卒業)が1914～1921年、高橋濱吉(1913年英語部卒業)が1915～1918年、内田亀次(1912年国語漢文部卒業)が1920～1921年、

加藤晴秀（1911年博物学部卒業）が1921年に教諭として所属していた。約10年の「師範学校不在期」に7名の広島高等師範学校卒業生が赴任しており、1912年以降、同校卒業生不在の年はない。彼らが附属臨時小学校教員養成所とどの程度の関わりを持ったのかという点は定かでないが、同校から尾形友助が師範科の設置された官立京城女子高等普通学校に校長（1921～1924年）として転出したことや、高橋濱吉が後に京城女子師範学校の校長（1935～1940年）と京城師範学校の校長（1943～1945年）を務めたことから、彼らがこの時期の師範教育に関わりを持っていた蓋然性が高い⁽⁶⁾。

また、附属臨時教員養成所、師範科、教員速成科が設置された朝鮮総督府京城高等普通学校には、長谷了慶（1907年博物学部卒業）が1911年、竹田喜久雄が1912～1921年、植田寅太郎（1907年地理歴史部卒業）が1912～1920年、古谷伝一（1906年数物化学部卒業）が1912～1918年、小河原義照（1911年英語部卒業）が1914～1916年、後に朝鮮総督府京城中学校に転任した内田亀次（前出）が1914～1919年、池原茂二（1918年教育科卒業）が1918～1919年、堀乙次郎（1917年数物化学部卒業）が1919～1920年、宇留島喜六（1908年数物化学部卒業）が1920年、藤谷宗順（1914年国語漢文部卒業）が1921年に教諭として在籍している。「師範学校不在期」の全期間を通じて10名の広島高等師範学校卒業生が赴任しており、朝鮮総督府京城高等普通学校でも広島高等師範学校卒業生不在の年はなく、常に複数の卒業生が教諭として在籍している。このうち池原は、1920年に「内地」に戻り、同年から兵庫県姫路師範学校の教諭となり、後に愛媛県第一師範学校（1926～1929年）の教諭となったほか、「内地」に戻り、1924年に宮崎県師範学校教諭となった堀乙次郎や1926年、朝鮮総督府編修官を務めながら京城師範学校の講師を兼務した藤谷宗順がおり、後に「内地」および朝鮮で師範教育に携わった者が複数含まれていることが確認される。

そのほかにも、京城女子高等普通学校には1917年に田中広吉（1906年博物学部卒業）、1914～1917年に宇留島喜六（前出）、1920年に高田邦彦（前出）が教諭として、大邱高等普通学校には1917～1918年に梅澤新一郎（1917年数物化学部卒業）が、1919～1920年に田坂周六（1919年教育科卒業）が教諭として、1921年には高本千鷹（前出）が校長として在籍している。また、咸興高等普通学校には、1918～1921年まで仲川弥作（1918年国語漢文部卒業）が教諭として在籍している。やはり後に「内地」や朝鮮で師範教育に携わった者が含まれていることが注目される（高田邦彦は1921年に京城師範学校に、田坂周六は同じく1921年に広島県三原女子師範学校教諭に転任している）。

1911年11月から1921年3月までは朝鮮に師範学校が存在しない「師範学校不在期」ではあるものの、臨時の教員養成所が附設された朝鮮総督府京城中学校と師範科、教員速成科が設置された朝鮮総督府京城高等普通学校には常に複数の広島高等師範学校卒業生が教諭として勤務していたほか、同様の師範教育を担った京城女子高等普通学校、大邱高等普通学校、咸興高等普通学校にも卒業生が教諭として在籍していた点が注目される。後述するように1921年以降、朝鮮に師範学校が漸次増設されるのに伴い、師範学校に勤務する広島高等師範学校の卒業生が増えるが、こうした「新設師範学校期」における卒業生の広がりがある初期から見られた背景には、「師範学校不在期」における卒業生らの教員養成教育への関わりがあったと考えられる。

すなわち、1920年代以降、朝鮮に師範学校が新增設されたのを機に広島高等師範学校の

卒業生が朝鮮における教員養成に関与し始めたわけではなく、「師範学校不在期」からの関わりを持ち、その下地のうえに、「新設師範学校期」における関与の拡大が為されたと見ることができるのである。

第2項 「新設師範学校期」(1921年4月～1945年)

次に「新設師範学校期」(1921年4月～1945年)における広島高等師範学校卒業生の広がりについて見ていこう。

「朝鮮教育令」中の文言として師範学校が登場するのは1922年のいわゆる「第二次朝鮮教育令」においてである⁽⁷⁾。しかし実際には、この「第二次朝鮮教育令」が施行される1年前の1921年5月5日には、京城師範学校が開校式を挙行している。開講式翌日の『京城日報』にはその様子が次のように報じられている。

朝鮮教育のエポックメイキングとして兼て計画されてみた京城師範学校は愈々五月五日午前九時京城中学校講堂に於て演習科生に対して第一開校式を挙行し定刻に至り赤木新校長は師範学校設立の事情と目下の朝鮮教育界の状況を説き、青年教育家たるべき確固たる志操の修養を訓話しついで新任教諭を紹介した。師範学校は普通科と演習科とに分かれてゐる。普通科は目下募集中である。⁽⁸⁾

【表2】赤木萬二郎経歴

記事中の「赤木新校長」とは、広島高等師範学校教授、平壤中学校初代校長を経て着任した、赤木萬二郎(在任期間は1921～1930年)のことである(【表2】は赤木の経歴をまとめたものである)。

この開校式が行なわれたことにより、朝鮮における新たな師範学校制度の端緒が開かれ、翌1922

1891年	東京高等師範学校文科卒業
1902年度 ～1915年度	広島高等師範学校で教鞭をとる
1916年	広島高等師範学校教授を辞して朝鮮に渡る。
1916年4月	平壤中学校校長(初代。三等二級の奏任官)
1921年4月 ～1930年1月	京城師範学校校長(まもなく「勅任待遇」)
1931年12月	病没(東京)

年の「第二次朝鮮教育令」施行によって正式に教員の養成は師範学校にて行なうことが規定されたのである。その後、1923年までにすべての道に公立師範学校が設立された。ただし、各道の師範学校には、普通科・演習科が設置されず、いずれも修業年限が短い特科を中心とした編成であった。その結果、唯一の官立で普通科・演習科を置く京城師範学校の卒業生は第一種教員、その他の師範学校卒業生は第二種教員として任用され、資格とそれに伴う待遇に差が生じることとなり、京城師範学校を中心とする教員社会のヒエラルヒー秩序が形成された。初代校長となった赤木が、1922年の『朝鮮』の誌上で、京城師範学校の使命について、「朝鮮全道の師範学校の中心となるべく、其の責任の重いことを感知して居る」⁽⁹⁾と述べていることから後に設置される他の師範学校とは一線を画する存在であることが自負されていたことが窺える⁽¹⁰⁾。

その京城師範学校には、開校当時12名の教員がいた。そのうち4名は広島高等師範学校の卒業生である。白井規一(1907年地理歴史部卒業)、小林致哲(1908年数物化学部卒

業)、須貝清一(1909年英語部卒業)、福富一郎(1914年博物学部卒業)の4名であり、いずれも校長の赤木萬二郎が広島高等師範学校で教鞭をとっていた時期に生徒として同校で学んでいた人物である。加えて嘱託の高田邦彦(1915年国語漢文部卒業)も広島高等師範学校の卒業生でやはり赤木の広島高等師範学校教授時代に在学していた。

その後も赤木の校長在任中に、16名の広島高等師範学校卒業生が京城師範学校の教員として着任している。具体的には、三宅右祐(1912年数物化学部卒業)、河野宗一(1914年博物学部卒業)、山野井喜重(1915年数物化学部卒業)、鈴木文夫(1920年文科第一部卒業)、田村龍太郎(1914年地理歴史部卒業)、白神寿吉(1917年教育科卒業)、武田誓蔵(1921年文科第二部卒業)、鎌塚扶(1925年徳育専攻科卒業)、松本隆太郎(1925年教育科卒業)、藤谷宗順(1914年国語漢文科卒業)、崔允植(1922年理科第一部卒業)、安岡源太郎(1908年英語部卒業)、岡毅(1923年理科第二部卒業)、八束周吉(1926年教育科卒業)、中村捨松(1928年理科第二部卒業)、市村秀志(1913年数物化学部卒業)の16名である(着任順)。このうち、三宅右祐、河野宗一、山野井喜重、田村龍太郎、白神寿吉、藤谷宗順、安岡源太郎、市村秀志の8名は赤木が高等師範学校で教鞭をとった時期に在学していた人物である。また、武田誓蔵は、広島高等師範学校で赤木の指導を直接受けた世代ではないが、武田の京城師範学校赴任(1925年)には、赤木が直接関わったことを示す以下の証言(武田本人による回想)がある。

その夜京城師範学校の赤木先生から、英語の主任教諭に來任する様強く要望されたが、広島師範の渡辺校長は卒業生の転任には賛成だが、君の転出は承認出来ないと拒否されたが、その後両校長間で交渉が続けられ渡辺校長の譲歩により転任問題は解決した。(11)

武田は1921年に文科第二部を卒業し、同年から広島県師範学校に教諭として勤めていた。どういう経緯であったのかは定かでないが、1925年、赤木は武田の京城師範学校への來任を「強く要望」したという。証言の中に登場する「渡辺校長」とは、当時の広島県師範学校校長であった渡邊信治(在任期間は1919~1926年)のことで、赤木の東京高等師範学校の後輩である。また、渡邊は1930年に赤木の後を継いで第二代の京城師範校長に着任する人物でもある。こうした状況から、京城師範学校の教員人事における赤木萬二郎の権限・影響力が強大であったことを窺うことができる。

なお、教諭の数では広島高等師範学校出身者数が東京高等師範学校出身者数を上回るが、校長に関しては、4名中3名が東京高等師範学校の卒業生である(初代の赤木萬二郎、第二代の渡邊信治、第三代の岩下雄三が東京高等師範学校卒業生、第四代の高橋濱吉が広島高等師範学校卒業生)。

すでに稲葉が指摘していることであるが、京城師範学校は、「表徴や寄宿舍(桐花寮)の名に東京高等師範学校の校章である桐を用いたり、東京高師の学生歌『桐の葉』の替え歌を京城師範学校の応援歌」(12)とするなど、初代校長であった赤木の意向により「茗溪色」の濃い学校文化となった。しかし、上述のように、教諭には広島高等師範学校出身者が多く、京城師範学校は決して、あらゆる面で「茗溪」、「尚志」のいずれか一色に染められることはなかった。これは、東京高等師範学校の卒業生であり、広島高等師範学校に14年在

職したという経歴を持つ赤木が初代校長であったからこその特徴といえる⁽¹³⁾。

おわりに

本稿は、広島高等師範学校の卒業生らが、帝国日本の「外地」の中等学校でどのような広がりを見せたかということについて、ある特定の範囲（朝鮮、師範教育界）に絞ることとでその具体的様相を示すことを図ったものである。

先行研究でも 1921 年以降、朝鮮に新增設された師範学校に広島高等師範学校卒業生が赴任したことが明らかにされているが、本稿では、「師範学校不在期」からの連続性という観点から卒業生らが広がりを見せた背景について論究した。具体的には、朝鮮に師範学校がない時期においても、広島高等師範学校卒業生らが中等学校での教員養成に関わっていた蓋然性の高さを指摘し、1920 年代以降、朝鮮に師範学校が新增設されたのを機に彼らが朝鮮における教員養成に関与し始めたわけではなく、「師範学校不在期」からの関わりを持ち、その下地のうえに、「新設師範学校期」における関与の拡大が為されたと見ることができることを示した。

また、「新設師範学校期」における京城師範学校での事例に着目し、特にその初期においてはかつて広島高等師範学校で教鞭をとった赤木萬二郎校長の存在を軸に広島高等師範学校卒業生らの赴任と同校での広がりについての確認を行った。しかし、「新設師範学校期」における広島高等師範学校卒業生らの広がりやネットワークについての知見を得るには、同期間内における制度の変化や京城師範学校以外の師範学校における状況についてのさらなる検討を要する。本稿ではこうした点について十分に論究することができなかつたが、課題に関わる覚え書きを補論に記しておきたい。

補論

本稿で「新設師範学校期」として概括した時期においても師範学校の特徴に応じ、少なくともⅠ期とⅡ期に大別することができる。具体的には、京城師範学校のみが官立で他の師範学校が公立であった 1 官立 13 公立体制であったⅠ期（1921～1928 年）と全師範学校が漸次官立化していくⅡ期（1929～1944 年）である。それぞれの時期に設立された師範学校の状況についてまとめたものが【表 3】である。

【表 3】「新設師範学校期」に設立された師範学校の状況

新設師範学校Ⅰ期（1921～1928）	1 官立 13 公立体制 【官立】 京城師範学校 【公立】 京畿道公立師範学校、忠清北道公立師範学校、忠清南道公立師範学校、全羅北道公立師範学校、全羅南道公立師範学校、慶尚北道公立師範学校、慶尚南道公立師範学校、黄海道公立師範学校、平安南道公立師範学校、平安北道公立師範学校、江原道公立師範学校、咸鏡南道公立師範学校、咸鏡北道公立師範学校
---------------------	---



新設師範学校Ⅱ期（1929～1944）	全師範学校の官立化（最終的に16校）
	【官立】 京城師範学校、大邱師範学校（1929）、平壤師範学校（1929）、京城女子師範学校（1935）、全州師範学校（1936）、咸興師範学校（1937）、光州師範学校（1938）、公州女子師範学校（1938）、春川師範学校（1939）、晋州師範学校（1940）、清州師範学校（1941）、新義州師範学校（1942）、大田師範学校（1943）、海州師範学校（1943）、清津師範学校（1943）、元山女子師範学校（1944）

官立か公立かという差異による区分とそれに応じた検討は、特に「内地」から赴任先として選択される際に生じたであろう忌避感情の濃淡や他の学校との比較という局面に関わって必要と思われる。

また、いずれの時期においても京城師範学校とその他の師範学校という視点での事例の検討も要する。つまり、上記のⅠ期、Ⅱ期いずれにおいてもカリキュラムと卒業後の資格という点で京城師範学校とその他の師範学校との間には少なからぬ差異が存在した。朝鮮の師範教育界を牽引する京城師範学校への赴任とその他の師範学校への赴任との間にはどのような差が存在していたのか。

これらの課題に関わる注目すべき事例として、筆者の手元には1928年に官立化される直前の慶尚北道公立師範学校に「内地」から赴任し、1929年から1940年まで官立大邱師範学校の教諭を務めた岸米作という人物の私家版自伝がある。そこには、朝鮮の師範学校、しかも地方の公立師範に赴任することになった時のことについて次のように記されている。

三月四月とぼんやり過ぎた私に、口がかかったのが五月初め、朝鮮の道立師範学校だがどうかと母校からの声、朝鮮ときいて、いわゆる万歳運動のあった植民地ということなので、いささかたじろいだが、無職でゴロ寝しているわけにもいかないの
で、赴任を決心⁽¹⁴⁾

【表4】岸米作の経歴

1928年	広島高等師範学校卒業
1928年	慶尚北道公立師範学校教諭
1929年4月	大邱師範学校教諭
1941年4月	金堤公立高等女学校校長
1943年4月	忠清南道視学官

岸の回顧からは、朝鮮の公立師範学校への赴任が決してポジティブなものとして捉えられていたわけではないことがわかる。無論、感情に関わるこうした問題は詰まるところ個人によって異なるわけだが、「内地」から朝鮮への赴任という生活環境の変化を伴う決定を
く
だ
す
際
に
は
決
し
て
看
過
で
き
な
い
問
題
で
も
あ
る。

岸が赴任し、その後官立となった師範学校にも広島高等師範学校卒業生が教員として勤

めたことが確認できる。岸の赴任前後に着目すると、同校には八束周吉（岸と入れ替わりで全羅北道師範学校に転出）、朴寛洙、播本常次ら広島高等師範卒の教諭が在職している。また、1934年には広島高等師範学校卒業生の鳥飼生駒が校長となり、1938年まで同職を務めたことも注目される。今後はこうした京城師範学校以外の師範学校における広島高等師範学校卒業生ら広がりとして赴任をめぐる個々の状況についても検討したい。

【注】

- (1) 広島大学教育学部日本東洋教育史研究室編『中等教員史の研究』第一輯、1987年、105頁。
- (2) 同上。
- (3) 京城師範学校、大邱師範学校、平壤師範学校、京城女子師範学校、全州師範学校、咸興師範学校、光州師範学校、公州女子師範学校、春川師範学校、晋州師範学校、清州師範学校、新義州師範学校、大田師範学校、海州師範学校、清津師範学校、元山女子師範学校の16校である。
- (4) 稲葉は、教員数の比較により、「茗溪会の朝鮮半島進出の勢いが尚志会より強かったとは必ずしもいえない。昭和期の朝鮮教育界におけるプレゼンスは、むしろ尚志会のほうが大きかったのではないかと指摘している（『旧韓国～朝鮮の日本人教員』九州大学出版会、2001年、249頁）。
- (5) 併合前に設立されていた官立漢城師範学校の廃校をめぐる議論や新たな教員養成制度の在り方が模索された様子については、本間千景の『韓国「併合」前後の教育政策と日本』（佛教大学研究叢書八、思文閣出版、2010年）に詳しい。
- (6) 特に高橋濱吉は、師範教育界において著名な人物となり、京城女子師範学校の校長着任以降、自身の教育論、女性教員養成論を中心に教育雑誌に多数寄稿している。例示すれば、「天祖の神勅と国体の本義」（『文教の朝鮮』1939年5月号）、「女教員論」（『朝鮮の教育研究』、1939年10月号）、「国民学校制度実施上の疑問と応答」（『文教の朝鮮』1941年8月号）、「教育に携る者の矜持」（『文教の朝鮮』1942年2月号）、「国体の本義透徹に関する施策」（『文教の朝鮮』1943年2月号）等がある。
- (7) 第13条に「師範教育ヲ為ス学校ハ師範学校トス」と規定された。
- (8) 『京城日報』、京城日報社、1921年5月6日付。
- (9) 『朝鮮』、朝鮮総督府、1922年3月号、101頁。
- (10) 京城師範学校と他の師範学校との差異の詳細については、拙著『植民地朝鮮の学校教員一初等教員集団と植民地支配一』（九州大学出版会、2011年）を参照されたい。
- (11) 『京城師範学校史 大愛至醇』1987年、157頁
- (12) 稲葉継雄『旧韓国～朝鮮の「内地人」教育』、九州大学出版会、2005年、304頁。
- (13) なお赤木は、1928年に京城師範学校に附設された朝鮮初等教育研究会の研究成果を発信する媒体として『朝鮮の教育研究』を創刊する際、同誌を東京高等師範学校が発行する『教育研究』と広島高等師範学校が発行する『学校教育』を引き合いに出して位置づけており、双方を意識していたことが窺える。具体的には、「朝鮮の環境民度を顧慮して実際の見地に立ちて以てこの聖代に酬る所以の攻究を遂ぐるの概なかるべからず。吾等同人は、内地に於ける『教育研究』『学校教育』に対立せる、熱と力と意気とに富みたる「朝鮮の教育」として是所に微衷を捧げんとす」（『朝鮮の教育研究』発刊に際して）『朝鮮の教育研究』、創刊号、1928年4月）と述べている。
- (14) 岸米作『流轉教育六十年』1982年、42頁。